『風景によせて2022　たびするつゆのふね』レポート

1.上演記録

制作スケジュール

メンバーの声

2.アーカイブ

プロセス便

風景を感じるワークショップ《みる、はなす》

3.上演を受けて

寄稿1（平野雅彦氏）

寄稿2（山口茜氏）

鑑賞者の声

4.ポートフォリオ

〈ランドスケープ・シアター〉とはなにか

過去の上演・ソノノチとは

文:中谷和代　撮影:脇田友

車の窓からいつも見える田園のパノラマ。

泉の恵みと人々の営みを感じるこの場所の風景に

「つゆ」のような記憶が沁みてきて、やがて川となって流れて行きます。

わたしたちはその流れにそって、小さな舟を出します。

ほんの小さな、目をこらさないと見つからないような。

1.上演記録

『風景によせて2022　たびするつゆのふね』

構成・演出　中谷和代

4年目となる、原泉での滞在制作です。招聘くださった原泉アートプロジェクトの皆さま、上演を受け入れてくださった地域の皆さま、その他多くの皆さんのお力添えに心から感謝しております。

滞在中、リサーチを兼ねて地域の方からいろんなお話を伺いました。今、旧JAの建物の倉庫になっているあたりには昔小学校があったこと。昔、目の前に広がる田んぼを縦断するように大きな川が流れていたこと。しかし近い将来、この学校や川があったことを知っている人もいなくなってしまうだろうということ。私達がこの話を聞けたということは、学校も川も、まだその場所に残っています。あったことを覚えている限り、それはなくならないのです。そこで私が感じたことは、どんなことでも、今目の前に見えているものがすべてではないこと。見えるものも見えないものも含めて、大切にとらえたいということです。

そのためには、すごくゆっくり歩いたり、立ち止まったりして見てみるといいかもしれない。じゃあもっとゆっくりにしてみよう、少し周りを見渡ししたら何が見えるだろう・・・。そういうところから今回のクリエイションはスタートしました。自分の中に流れる時間の声に耳を傾けてみると、この慌ただしい毎日の中にも、自分らしいと思える瞬間を少しずつでも取り戻せるような感じがするのです。

この作品は、私たちがこの場所に立ったことで、「そうせざるを得なくなった」ものの結晶です。観終わった後、上演場所の見え方の変化をぜひ確かめてみてください。それがこの作品の意味であり、あなたにしか見えない「風景のすがた」だと思います。この場所に居合わせた私たちが、この舟でもっと遠くへ行けたら。そんな思いで届けます。

風景によせて。

【日時】 2022年11月19日（土）−20日（日）
各日　11:30-/13:30-/15:30-　開演〔小雨決行、荒天中止〕
上演時間 約30分間

【場所】 「旧掛川市JA原泉支所」付近一帯（静岡県掛川市孕石60-2）
「原泉アートデイズ！2022」で上演

【観覧料】 自由（ドネーション）

【クレジット】 構成・演出：中谷和代
クリエイションメンバー：芦谷康介、宇津木千穂、清川敦子、柴田惇朗、瀬乃一郎、田中直樹、筒井茄奈子、中谷利明 、neco、日向花愛、藤原美保、ほっかいゆｒゐこ、村田瞳子、森岡りえ子、脇田友、渡邉裕史

主催：合同会社nochi、ソノノチ、原泉アートプロジェクト
協力：一般社団法人フリンジシアターアソシエーション、サファリ・P、スピカ、劇団三毛猫座、廃墟文藝部

supported by KAIKA　芸術文化振興基金助成事業
京都芸術センター制作支援事業

観覧者数

延べ150名

11月19日（土）　**合計102名**
1回目：38名
2回目：37名
3回目：27名

11月20日（日）　**合計48名**
1回目：17名
2回目：20名
3回目：11名

制作スケジュール

『たびするつゆのふね』の制作は2022年の6月に始まった。というと正確ではないかもしれない。以下の表では6月からこのプロジェクトが始まったことになっているが、クリエイションにおいても制作においても、多くのアイデアや作業は途切れなく過去のプロジェクトから引き継がれ、今後も引き継がれていく。クリエイションメンバーもその多くが滞在制作を経験しており、今回の上演はその経験に連なるものだ。

以下の製作期間中に行われるのが『たびするつゆのふね』にだけ関係する、というわけでもない。例えば9月17日に京都芸術センターで行われた『制作室をあければ』は一見普段の稽古場そのまま。しかし、それは同時にパフォーマンスとしての側面も持っていた(『「クリエイションをする私たち」の展示』)。入れ替わり立ち替わり、多くの人々が訪れ、ときに遠くからその様子を観察し、ときに会話の中心となった。

ミーティングを行っている横でパフォーマーがアップしたり、チラシのデザインに関する会話が自然と次年度の上演予定の話にスライドすることは日常茶飯事である。確かに言えるのは、『たびするつゆのふね』に関することも、関係のないことも、全て一緒くたにソノノチの活動の一環であった、ということくらいだろう。ときに複数の作業や役割をジャグリングしながら、「ソノノチでの作り方」は徐々に身体化されていく。その意味で、『たびするつゆのふね』のクリエイションは、あなたがこれを読んでいるこの瞬間、まだ終わっていない、ともいえるかもしれない。

	6月	7月
現地コーディネーターとの オンラインセッション		
アートディレクション・ミーティング オンラインセッション		
滞在制作：計5回、50日間の滞在	11日間	9日間 出演者 オーディション
京都での稽古・ミーティング		
風景を感じるワークショップ《みる、はなす》		
上演		
「場」ができるまで 展　～きく・みる・すごす～ 準備・開催		

6月の滞在の様子。この時点でこの孕丹地区の風景）は上演場所の一候補だった。

8月	9月	10月	11月	12月
中谷単独滞在 4日間		15日間	11日間	
出演者 オーディション	『制作室を あければ』			
			12・13日	
			19・20日	
				21～26日

メンバーの声

『たびするつゆのふね』をつくったクリエイションメンバー。そのうち何人かに「作品作りの過程で印象に残ったこと」というテーマで、滞在制作・上演を経た時点でのコメントをもらいました。

筒井茄奈子／パフォーマー

何万光年も離れたような自然溢れる場所、原泉の自然を日々感じていました。ここにいる私たちの息と生が流れ食事をして排出する。血の流れを常に感じ、再び創作をする。野生動物の研ぎ澄ます危機感だったり天道の匂いや瞬きはいつもの場所では感じることができません。この環境の中での創作は、”生きる”に直結していました。

宇津木千穂／パフォーマー

時間と身体の100%を作品のために使えるが、100%は作品のために使えないのが滞在制作だと感じました。原泉では、作品のことだけを考えてそのための生活ができたのですが、それ以外の行動に普段以上の時間と労力がかかりました。そしてそれが作品に取り込まれ身体に馴染んだ瞬間に、滞在制作の意味を実感しました。

中谷和代／構成・演出

夏、川に毎日出かけて、泳げるようになったこと。
当たり前かもしれないけれど、もがけばもがくほど身体は沈んでいく。少しこわいけれど、流れに任せて力を抜いてみると身体は浮く。
もう大丈夫だと思う。
あと地元の方の身の上話がとても印象に残ったけれど、ここには書けない。

清川敦子／衣装

360°自然に囲まれた原泉で一番感動したのは、緑の色が違うという事。自然が作り出した緑色と人工的に作り出した緑色は似ていることはあっても色の深さが違う。そらそうか、草木の人生の色だもんな～と一人エモくなった。

オレンジ色の花がプラスチックの灰色のパイプに寄りかかっている。茶色い土の上に覆いかぶされているシートのブルー。こんなふうに絶対混じり合わない者同士が隣り合っている。これだ！と思い、衣装はあえて背景と同色を使うことにした。

どこか似ている、けれどよく見たら全然違う。見つけることの嬉しさを共有出来たら嬉しい。

村田瞳子／演出部

稽古場・劇場を転々としながら創作することが常である私にとって、ひとつの場所で創作すること自体が新鮮な体験だった。

会場の風景から構成を組み立て稽古をするため、毎日同じ場所を見ているはずが、あらゆるものが刻々と変化し、風景が立体的に見えてきた。この体験は滞在制作という濃い密度で物を見つめる時間だからこそのものだと思う。

また、創作が生活となだらかに繋がっているからか、緊張せずとも1つの作品に集中することができた。

2.アーカイブ

プロセス便

「ランドスケープ・シアター（風景演劇）」の創作プロセスを多角的に体験するためのプロダクトである「プロセス便」は、上演映像、クリエイションメンバーによる対談、そして購入者限定の特典文書をセットにした販売用アーカイブ。

セット内容

●『風景によせて2022　たびするつゆのふね』本番上演映像

静岡県掛川市北部の原泉地区で上演する作品の記録映像です。
パノラマの風景で上演した作品の上演映像をお送りします。

●たびするつゆのふね　メンバー対談［音声収録］

クリエイションメンバーの対談を音声でお届けします（今回の滞在制作について、3組の対談が収録されています）。
作品づくりと生活を一緒に過ごすクリエイションメンバーによる現地対談です。

●購入者限定の創作プロセスにまつわる特典文書

プロセス便でしか読むことができない演出の中谷和代のディレクターズノートをデジタルデータでお届けします。

●当日配布パンフレット（データ配布）

ご予約はこちらから→

風景を感じるワークショップ《みる、はなす》

「風景を感じるワークショップ《みる、はなす》」。その趣旨は、なかなか日常では行うことの少ない「風景を鑑賞する」ということを他の人の意見に耳を傾けながら体験する、というものだ。両日ともにメンバーがファシリテーションを行い、約一時間かけてじっくりと風景との対話を行った。

ワークショップでは「5つの問いかけ」（下図）が用いられた。質問を追うごとに徐々に抽象的になっていく質問をガイドとして、参加者は徐々に風景を立体的に捉えていく。終了後には参加者から「風景を愛着を持って見ることができた」「あの山の木の葉っぱからは水滴が落ちているかもしれない、というように、想像がふくらんだ」などの声が上がった。

風景を感じるワークショップ - みる、はなす -

① 見えたものを５つ言ってみる

② ５つの中から１つ選んで別の言い方で言ってみる

③ 長い時間見てはじめて気づいた事を言ってみる

④ 行きたいところへ行ってみる

⑤ はじめに見た風景と今見ている風景は
どのように違うか言ってみる

風景の語源は、主観的であることです。風景とは客観的に定義できず、今この場所に立つあなただけに見える・感じられるものです。目の前に広がる空間にじっくりと向き合い、気ままに旅する1時間です。
（過去の紹介文より）

このワークショップは、ソノノチのランドスケープ・シアター（風景演劇）をより深く味わうために開発したものです。パフォーマンス上演とセットで体験していただくことで、自分なりの見方にプラスして、他の人の見方や感じ方を取り入れることができます。

内容は、対話型鑑賞という美術鑑賞の手法を用いつつ、同じ場所の風景を見ながら複数の参加者で5つの質問に答えていきます。

現在は「みる・はなす」バージョンのみですが、今後「あるく」や「きく」といった他の方法で風景にアプローチするワークショップも実施予定です。

3.上演を受けて

【寄稿1】　時間をかけて風景と身体をなじませる

平野雅彦（国立大学法人 静岡大学 人文社会科学部客員教授）

「風景演劇（ランドスケープ・シアター）」、とは何か。2019年から原泉ではじまった「演劇のようなもの」を、ソノノチはそう呼ぶ。

演者は、果たして主体なのか客体なのか。前景なのか、それとも後景（背景）なのか。ソノノチのパフォーマンスを観ながら、毎回この問いが頭をかすめる。「演技」がはじまると、あるときには、その横を軽トラックが走り去って行き、虫取り網を持った親子がこちらに向かって歩いてくる。焼き畑の煙が上がる。鳥や虫が集（すだ）く。草花は風に吹かれて烈しく揺れる。あなうらから土のぬくもりが伝わってくる。目を遠く放てば山々は書割ではないかと錯覚さえ起こす。すべては幸（さきわ）う原泉の日常である。

それら地勢風土の一部となって演者が動き出すと、楽曲もまた喨喨と景色を包み込む。観客は、主体（演者）と客体（自然）、主体（自然）と客体（演者）という両方をスイッチしながら眺めることとなる。主体と客体は、観客の視点によって、前景となったり後景となったりする。場合によっては、何も起きていないことが起きているようにもおもえたりする。さらに言えば、従来の演劇にある、「ここを観ろ」「このセリフを聴け」という演出はほぼない。すべては観客が、演者と風景とを同時に切り取って、思い思いにシーンを構成する。このことはその日その時そこにいる誰ひとりとして同じものを観ていないことを意味する。風景演劇の肝はまさにここにある。

現場で起きていることは、観るという行為ではなく、眺めると言った方がむしろぴったりくる。眺めるというと受動行為の意味にも取れる。だがそう決め付けるのは性急だ。「眺」はその象形からもわかるように、（注意深く構えて）兆しを見逃さないことである。演者はその時空からナニモノかを呼び寄せ、観客はナニゴトかの前触れをキャッチする。古の日本ではこれを「占う」といった。ちなみに古来中国では、兆をめでたい出来事の前ぶれともみた。それが日本に渡ると例えば桃太郎の話となる。この話では木偏に兆と書く桃が川を流れてくる。桃はたくさんの実をつける多産を表す意匠であって、子どものいない爺婆のところにその後の物語を予兆する桃が流れ着くというのは合点がいくだろう。われわれは風景演劇から吉兆を受け取っているのかもしれない。

風景と身体とをなじませていくには、それなりの時間を要する。その日その時、現場に出向き、即興（インプロヴィゼーション）で演技をおこなうことはひとつのメソッドである。一方で、何ヶ月も前から、場合によっては何年もかけて、そこで「生活」をして地域の空気にじっくりとなじんでいくことでつくりあげていく身体の在り方がある。風景演劇は後者になる。生活とは、（風景を）活かして生きることであり、（風景に）活かされて生きることだ。じっくりと時間の中にたゆたってつくり上げていく身体こそが、風景演劇そのものなのである。

原泉アートデイズでは、アーティスト・イン・レジデンスという手法を採って芸術祭全体をつくりあげていく。アーティストが中長期的に原泉と関わることが参加の条件のひとつとなっている。それはまさに時間をかけて、地域の水や空気、動植物、食材、住民たちとなじんでいくことを意味する。そこでは、オレがオレが、と主語をつねに自分で語るアーティストはなじまない。むしろ、身体ごと原泉に投げ込んでしまうこと、すなわち主語を捨てることで、ここならではの取り組みとなるのだ。しかしそこではアーティスト自身の考え方を大きく変えてしまう予測不可能な出来事が待っているかもれない。その証拠に風景演劇は、この原泉で生活することから生まれたではないか。求められるのは、自らの価値観を解体する勇気とそれを楽しんでしまえる思考の転換である。

ソノノチ代表の中谷和代（構成・演出）は言う。「すべてが乗るおぼんをつくりたい」。そう考えると、原泉アートデイズに参加しているアーティストたちや観客はひとり残らず風景演劇に参加しているキャストだともいえる。

【寄稿2】 気配 ーたびするつゆのふねを介してー

山口 茜（劇作家、演出家）

掛川駅前から出るバスに乗った。バスは珍しく満席だ。と言っても、この街をよく知っているわけではない。人口の少ない街の、こう言った小型のバスは、乗り手が少なくて運営が厳しいと言う話を聞いたことがあった。だからきっと珍しいのだろうと思った。しばらくして、車内に聞こえてくる会話の端々から、乗客は私たちが目指していた原泉アートプロジェクトに参加しようとする人が多数のようだとわかった。

バスは、曇り空の広がる人気のない街を抜け、山道に入る。比較的緩やかな山を上り、長いトンネルを抜けると、山に囲まれた広大な集落が見えてくる。他の大勢の皆さんとは別のバス停で降りた私たちは、会場よりも少し行き過ぎてしまったことに気がつく。しかししばらく歩くと、どこまでも見渡せる、稲刈りの終わった田んぼの奥に、その会場がちいさく見えた。田んぼと田んぼの間の畦道の上に、整然と椅子が並んでいたのだった。

「あれかな」と言う声を合図に、子供たちは走り出す。いつも生活している場所とは違う空気に、敏感に反応している。そこら辺に落ちている木切れを拾っては、投げながら歩く。街では滅多にお目にかかれない、歪な、大きな木切れ。それらはわずか半日だけ大切にされる宝物となって、子供たちのカバンにしまわれる。

会場にはすぐついた。並べられた椅子に座ると、目の前に、枯れ草色の、すっかり冬の準備を済ませた田園風景が広がる。風がきつく、駅前よりも気温が低い気がして、私はダウンジャケットのチャックを上まで上げて縮こまった　。一緒にきた子供たちはすぐに畦道を駆け出していき・・・それを追いかけた夫もろともすぐに見えなくなる。私はどこまでも広がる灰色の空と、地平線で交わる田んぼを見つめながら、13年前、この風景に強く惹かれたことをうっすらと思い出す。

当時の私は自然を求めていた。京都の山間部に家を借り、畑の真似事のようなことをしたり、演劇の上演をしたりもしたが、如何せん車の免許のなかった私が、そこにいられるのは短い時間だった。しかもその頃は色々と人間関係の変遷があり、それまで一緒に芝居をしていた仲間が次々にいなくなった。私は早々に自然から街へ逃げ戻った。

あの頃の風景が、そこにあった。もちろん、実際の場所は別だ。全然違う、けれどもそこに流れる風や、漂ってくる牛糞の匂いや、山や川や、まばらに通り過ぎる車や、農耕に従事する人々の姿は、私があの頃を思い出すのに十分だった。私はこの風景の何に惹かれたのか。そこで何をしようとして、できなかったのか。

ソノノチの「たびするつゆのふね」が始まる。清川敦子さんの衣装を纏った俳優が、畦道を歩き始める。歩いていないのではないかと思うほどにゆっくりと歩く。よく見ると遠くの方にも同じように歩く人がいる。ひとり、またひとりと視界に人が増えていく。まるでそれは、沈み行く夕日のようだ。1日から見ればその、ほんのわずかの時間が、しかし俳優の身体によってゆっくりと刻まれていく。私は普段ならこんなふうに見つめないはずの景色を、じっと見つめている自分に気がつく。

この時期の、刈り取られた稲の色、枯れた草に覆われた畦道の色、山に生えている木々の色、ポツンと見える黄色い葉をした木（あれはカエデだろうか）。その自然にある色合いがそのまま、衣装になっている。おそらくこの季節、この風景のために作られたのだろう。風景に同化したり、弾かれたりしながら風に揺れているテキスタイル。

それまでぽつりぽつりと上着を濡らしていた雨が、少し強めになる。その水滴に気を取られているうちに、最初に捉えたはずの人の姿が、視界から消えはじめる。ひとり、またひとりといなくなる。そういえば私の家族は、どこに行ってしまったのだろうか。

誰もいなくなって、雨もまた、止む。風も心持ち、緩やかになり、全てが終わってシン・・・となる。しばらくすると明らかにこの土地の人と思われる人物が、田んぼの真ん中に出てきて火を付ける。煙がまい上がり、焦げ臭い匂いが漂ってくる。野焼きだ。

私はふいに思い出す。あの頃の生活を。人気のない、あの場所を。トラックの轍や風にたなびくCD、鹿のふん、牛糞の匂い、金木犀の香り、山の子に盗まれた片方の革靴を。それらはわずかひととき、あの場所にあって、生き物の気配を表していた。姿はく、気配だけがそこにあると言う、その寂しさに耐えかねて、私は都会に逃げ帰ったのだ。

私はあそこで、やっぱり人を求めていたのだ。気配ではなく、人を。生活を共にする人。その、人の温もりを。

畦道を、夫と2歳の子供が歩いてくるのが見えた。程なくして、6歳の子供が全速力で私の体に飛び込んでくる。冷え切った小さな手が頬に当てられ、私の心は温もりを取り戻す。たびするつゆのふねが、終演する。

鑑賞者の声

開演を知らせると私は何かを見つけようと目を凝らしました。いつもの作品を見る姿勢でした。そしてパフォーマー4人に気づき動きに注目しました。やがて地元の人と思われる、いや演出?と曖昧になって引き込まれました。やがて目の前の光景を見ている私が”ここに居る”と気づいた時、私も見られているしインスタレーションに参加していると嬉しくなりました。

この場所は記憶します。私は原泉の風景の中に同化していました。

動くインスタレーションに感動しました。

＊＊＊

幻か？ゆっくりと動いていく弥生の衣装の影。トラックやバスがすれちがう。同じ空間にいながら別の時間を生きているような不思議な風景でした。

＊＊＊

毎年見せていただいています。また、美しくよい心持になりました。とても広い舞台で一度に演者すべてを把握できないのが、また良い感じで、現れ、消えるところも素敵でした。音楽も、火もよかったです。勝手な印象ですが、好きなアンゲロプロスの映画を本物で実体験として見ているような気がしました。

4.ポートフォリオ

〈ランドスケープ・シアター〉とはなにか

ソノノチが近年つくりあげてきた独自の上演形態。言葉の定義として「風景」は客観的に定義できず、主観的（私的）であることに加え、自然の中に街並みや人の営みが入ったものを指すと言われています（「景色」は主に自然の要素のみで構成されたものを指すことが多い）。

ソノノチは、この風景の主観性・唯一性に注目し、鑑賞者が人物（パフォーマー）だけでなく自然、そして建物などの人工物も含めた風景を、自身の関心や記憶に引きつけ、自由にフレーミングして鑑賞できるような作品を風景演劇シリーズと呼び、2020年より発表しています。

『風景によせて2022』コラムでは〈ランドスケープ・シアター〉とは何かを考察しております。

第1回はこちらから→

ソノノチとは

旅するパフォーミング・アート グループ。京都を拠点に2013年より活動を開始。近年は、空間そのものを作品として捉えるインスタレーションの手法を用い、劇場だけでなく、屋外や空き家での上演を行ったり、絵画や音楽や建築など、他分野のアーティストとのコラボレーションも行う。

主なメンバーは、中谷和代（演出家・劇作家）、藤原美保（俳優）、渡邉裕史（制作）。

撮影：脇田友

中谷和代

（演出家、劇作家、ワークショップデザイナー）

1985年、京都市生まれ。芸術大学入学時より演劇を始める。当初は俳優として学生劇団での公演をはじめ、市民劇、ミュージカル、学校巡回公演などに出演。2008年より本格的に劇作、演出活動を開始。現在は、劇作のほかに、演劇の持つ様々な力を社会に活かす活動を仕事にしている。

過去の上演

『風景によせて 2021　はらいずみ もやい』

泉公会堂付近

（静岡県掛川市黒俣62周辺）

撮影：脇田 友

『風景によせて 2021　かわのうち あわい』

惣河内神社 及び その周辺

（愛媛県東温市河之内甲4876）

撮影：駒 優梨香